

人生ハンド仏句

第17号

H. 15. 8. 1

(毎月1日発行)



信 受

ノーベル賞化学賞を受賞した田中耕一さん、東北大学を卒業し、島津製作所に勤務する四十三歳の若き技術者は、サラリーマンの星として一躍「時の人」となり、お陰で富山県も全国に知れ渡りました。その人柄とともに興味深かったのは、受賞対象となった研究が、失敗から生み出された事である。「失敗は成功のもと」を地でいく快挙となりました。

考えてみれば、今日の経済大国・日本の出発も、五十七年前の敗戦という失敗から始まりました。しかし、成功を重ねるうちに失敗を恐れ、挑戦する気持ちをすっかり忘れてしまいました。忘れるとは、「心」を「亡くす」と書きますが、日本経済は、田中さんとは反対に「成功は失敗のもと」を地でいく結果となりました。今回のノーベル賞受賞が、いまだに出口の見えない世の中に、一筋の光明をもたらすと同時に、日本人に挑戦する気持ちをよみがえらせてくれることを願っています。

日蓮聖人のお言葉に「妙とは蘇生の義也、蘇生と申すはよみがえる義也」の一説があります。私たちは予想外のことが起きて不思議に思ったとき、「妙だな」という言葉を使いますが、日蓮聖人は、妙には蘇生させ、よみがえらせる不思議な力があると考えておられました。田中さんは実験中に、自分の考えていたこととは違う妙な現象、つまり失敗したと思った訳ですが、そこに成功のもととなる、ノーベル賞のもとがあったのですから、人生とは不思議なものです。今の日本にも妙な不景気が吹いています。この妙な風を逆風ととらえるのか、追い風ととらえるのが人生の分かれ目となります。

妙なる力の存在を信じていることが出来る人は、この風を追い風に出来ると私は確信しています。それは「妙とは蘇生の義也、蘇生と申すはよみがえる義也」の言葉を信じることが出来るかどうかにかかっています。我々信仰する上において二つの方法があります。一つは、日蓮聖人の教えを勉強して理解を深める「学信」。二つ目は、それぞれの体験によつて信仰の道へ入る「体信」。このことを日蓮聖人は「行学の二道に励み候べし」と仰っておられます。これを順序立てると、信「学」行となります。つまり、まずお話を信ずる。そして教えを学ぶ。それらを実践する行い、ということになります。「以信代慧（いしんだいえ）」とありますように、先ず大切なことは「信」の一字であります。法

華題目抄には、「それ仏道に入る根本は信を以て元とす。たとえ解（き）りなけれども信心あらん者は、鈍根も正見の者なり。たとえ解りあれども信心なき者は、誹謗闡提（ひぼうせんた）りの者也。鈍根第一の須梨般特（しゅりはんどく）は智慧もなく悟りもなし、ただ一念の信ありて普明如来となり給う」とありますように、いかに信が大切かか理解出来ます。どうぞ益々のご精進をお祈りしています。

住職 谷川寛俊

みんな輝く
時がある